

**P1-12-8 カルボプラチンに過敏反応を示した患者におけるシスプラチン投与の安全性**

千葉大婦人科・生殖機能病態学

山本憲子, 楯 真一, 錦見恭子, 植原貴史, 加藤一喜, 碓井宏和, 三橋 暁, 生水真紀夫

【目的】カルボプラチン (CBDCA) は婦人科悪性腫瘍に汎用されているが、長期投与に伴い過敏反応が出現することがある。過敏反応を示すようになった患者に、シスプラチン (CDDP) の投与が安全に行えるかどうか検討した。【方法】2003年1月から2011年4月に当科でCBDCAを含む抗癌剤投与を受けた患者のうち、CBDCAに対する過敏反応を示した22例について後方視的に検討した。【成績】CBDCA過敏反応が出現したレジメンは、初回が1例、secondが7例、third line以降が4例であった。過敏反応出現までのCBDCA投与回数は、3-43回で中央値が14.5回であった。過敏反応の重症度は、Grade1が3例、Grade2が5例、Grade3が2例、Grade4が2例であった。過敏反応を示した22例のうち12例(卵巣癌7例、卵管癌2例、腹膜癌1例、子宮体癌2例)にCDDPの投与(TP療法8例、IEP療法4例)が行われていたが、CDDPに対する過敏反応が出現した症例はなかった。7例では病勢の悪化によりCDDP治療が終了していたが、5例では現在も投与が継続されている。CDDP投与回数は、現在のところ中央値が3回(範囲:1-18回)となっている。一方、22例のうち5例にはCBDCA脱感作療法が行われていたが、3例にGrade1の過敏反応が出現し、CBDCA投与が継続できた症例はなかった。【結論】CBDCA過敏反応が出現した患者に対しても、CDDPは脱感作法によるCBDCAよりも安全に投与できることが示された。

**P1-12-9 カルボプラチン過敏反応症例に対するカルボプラチン脱感作療法・ネダプラチン療法過敏反応予知因子**

京都府立医大

黒星晴夫, 澤田守男, 辰巳 弘, 森 泰輔, 岩破一博, 北脇 城

【目的】カルボプラチン (CBDCA) は、長期投与に伴い過敏反応が出現することが知られている。われわれはCBDCA過敏反応症例を検討し、脱感作療法・ネダプラチン (CDGP) 療法などについて、その有用性と安全性について報告してきた。今回、さらなる症例の追跡を報告するとともに、過敏反応症例を起こす患者の特徴および事前の予知因子について検討したので報告する。【方法】当科にてCBDCAに対する過敏反応症例に対し、CBDCA脱感作療法を施行した。この脱感作療法にても過敏反応が出現した症例に対してCDGPの投与を行い、その安全性および効果について検討した。さらに、過敏反応の予知因子として、アトピー性素因の有無・CBDCA皮内反応の結果について事前にインフォームドコンセントを得たうえで、後方視的に検討した。【成績】CBDCA過敏反応発症率は9%であり、初回の過敏症が発症したコース数の中央値は12コース目で、投与量の中央値は8,000mgであった。15症例に対しCBDCA脱感作療法を施行し、このうち8症例では過敏反応を認めず最大5コースの脱感作療法を施行できた。CBDCA脱感作においても過敏反応を認めた5例のうち4症例はCDGPに変更した。RECISTおよびCA125の判定においてすべての症例でPR以上の効果を認めた。CDGP過敏反応は認めなかった。過敏反応症例のうち、アトピー性素因の疑われたものが8例あり、CBDCA皮内テストは施行できた10例のうち7例が陽性であった。【結論】CBDCA過敏反応症例に対し、CBDCA脱感作療法およびその過敏反応症例に対するCDGP療法の有用性が示された。さらに予知因子として、アトピー性素因の有無およびCBDCA皮内反応の有用性が確認された。

**P1-13-1 中等度催吐性化学療法におけるaprepitantの有用性**

奈良県立医大

赤坂珠理見, 小林 浩, 大井豪一, 古川直人, 吉田昭三, 川口龍二, 永井 景, 春田祥治, 棚瀬康仁, 重富洋志

【目的】抗癌剤による嘔気・嘔吐は(以下CNIV)は治療を受ける患者にとってもっとも避けたい事象のひとつである。婦人科領域でひろく用いられるpaclitaxel+carboplatin併用化学療法(以下TC療法)は中等度催吐薬に分類されており、paclitaxelは前投薬にdexamethasoneを必要としているために急性CINVの頻度は少ない一方、遅発性CINVの訴えは少なくない。中等度催吐薬についても本邦の制吐薬適正使用ガイドラインではaprepitantの使用が推奨されているが、MASCCやASCOのガイドラインでは記載されていない。今回我々はTC療法におけるaprepitantの投与時期における効果について検討した。【方法】2010年2月から12月まで当院で婦人科癌に対してTC療法を行った患者で、aprepitantを初回より服用した群と2サイクル目より服用した群でのCINVについてNCI-CTC version2.0で評価した。またその他有害事象についても検討した。【成績】子宮頸癌1例、子宮体癌5例、卵巣癌8例の計14例が対象となった。6例が初回よりaprepitantを服用し(初回投与群とす)、8例が2サイクル目より服用を開始した(翌回投与群とす)。嘔吐については両群とも完全制御し得た。嘔気については初回投与群の2例がgrade0であったのに対して、翌回投与群は7例がdown gradingしたもののgrade0は見られなかった。またaprepitantとdexamethasoneを同日に使用したことによる重篤な有害事象は認めなかった。【結論】TC療法において初回よりのaprepitantの使用が好ましいと考えられた。またaprepitantとdexamethasoneの併用による重篤な有害事象は認めなかった。